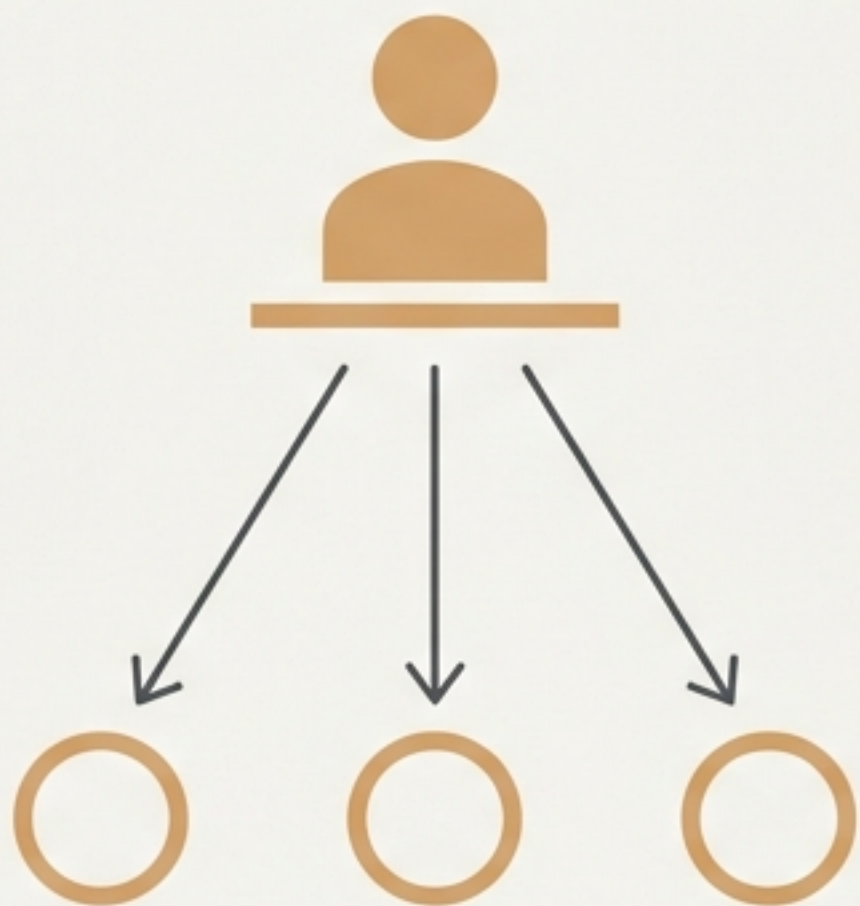


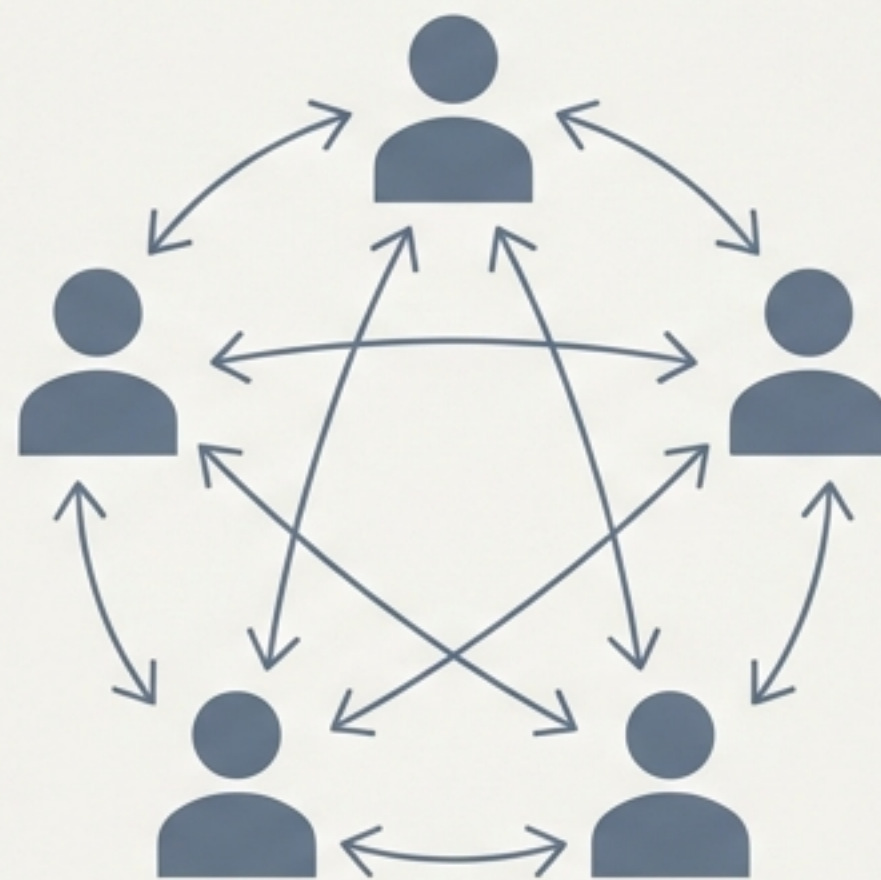
「教える」から「学ぶ」への変革

学習理論の進化がもたらす、教育と人材開発の新しいかたち

教える



学ぶ



なぜ今、「学び」の変革が求められるのか？

教育と学習の概念は、常に一体であるとは限らない。現実には「教授と無関係に成り立つ学習」や「教授が学習を導けない場合」が存在する。

本プレゼンテーションでは、学習理論の歴史的変遷を辿り、その進化が現代の教育現場や社会人育成にどのような影響を与えているかを解き明かす。



1. 学習論の原点：
行動主義

2. 内面の探求：
認知主義・構成主義

3. 協働による知の創造：
社会的構成主義

4. 理論から実践へ：
現代の学校教育と
社会人教育

学習論の原点：学習とは客観的に観察できる「行動の変化」である

行動主義的学習論

- 19世紀後半、主観的な「内観法」への批判から、客観的な心理学として「行動主義」が誕生。
- 学習の定義：「行動が変わること」。頭の中の思考プロセスは「ブラックボックス」とみなし、分析の対象としない。
- 評価の考え方：「わかったなら、やって見せなさい」。学習の成立は、学習者の行動の変化によってのみ示される。



スキナーの「オペラント条件づけ」が教育にもたらしたものと、その限界

提唱者：B.F. スキナー（B.F. Skinner）

中核理論：「オペラント条件づけ」。報酬（正の強化）により、自発的な行動の生起確率を高める。スキナー箱の実験が有名。

教育への応用：「プログラム学習」。やさしい問題から難しい問題へ、反復練習を通じて基礎・基本を段階的に習得させる。

課題

- 複雑な人間心理：人間の学習は、報酬への価値観や知的好奇心など、動物の訓練とは異なる複雑な心的条件に左右される。
- プロセスの無視：学習のプロセスを評価せず、結果（行動）のみに注目するため、思考の過程や理解の質を捉えられない。



プログラム学習



「知的好奇心はどこへ？」

ブラックボックスを開く：学習とは頭の中の「シエマ」が変化すること

認知主義的学習論

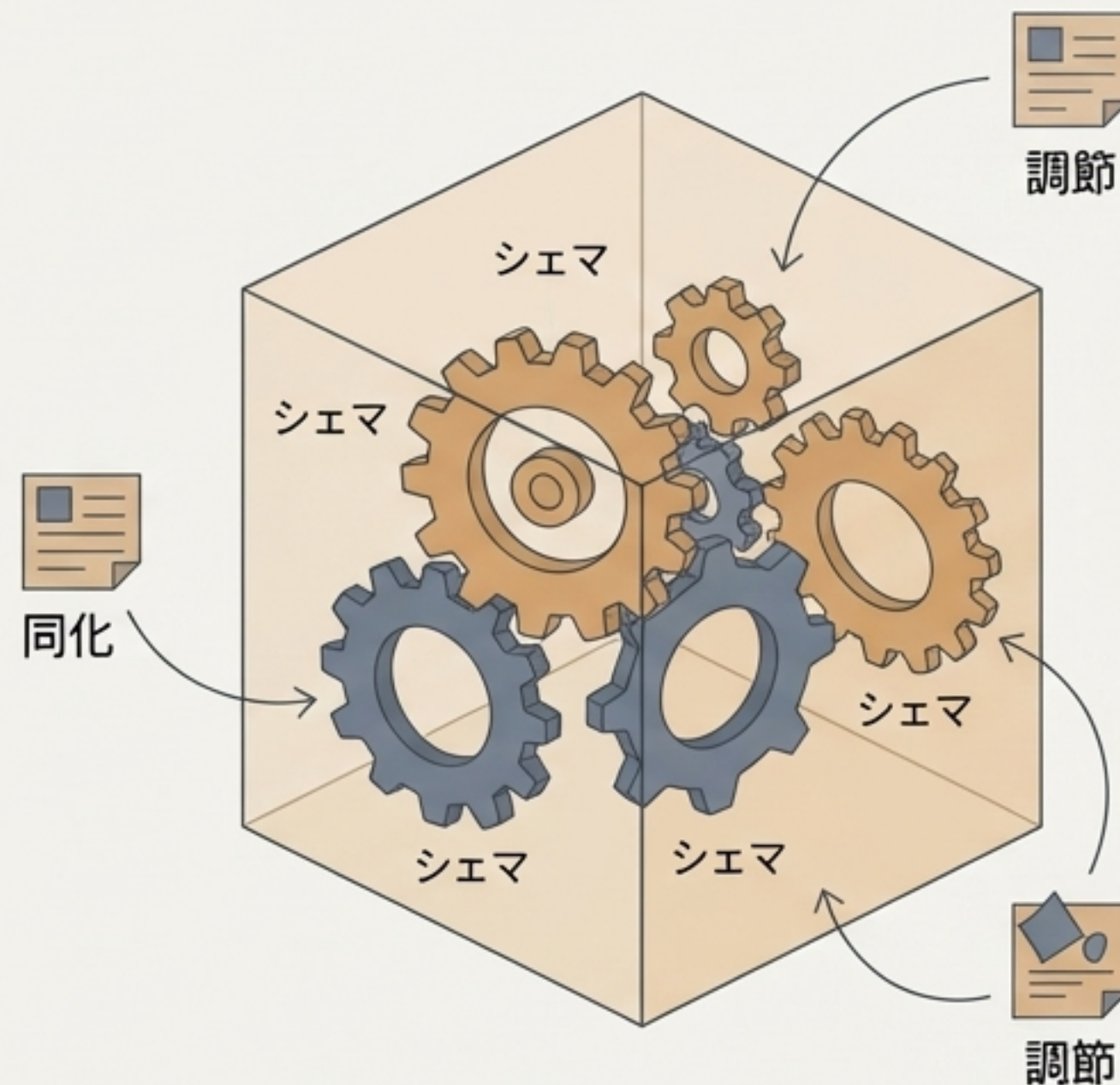
提唱者: ジャン・ピアジェ (Jean Piaget)

行動主義が無視した学習者の「内観」に着目。学習を「頭の中での変化」として捉える。

シエマ (Schema) : 外部の事象を取り入れるために、学習者が既に持っている心的構造 (知識の枠組み)。

学習のプロセス:

- 同化 (Assimilation) : 既存のシエマで新しい情報を受け入れる。
- 調節 (Accommodation) : 既存のシエマでは対応できない場合、シエマ自体を修正・更新し、新たなシエマを獲得する。



学習者は知識を注がれる器ではない。自ら知識を築き上げる能動的な存在である

構成主義的学習論

従来の学習観（Passive View）



受動的学習観

構成主義の学習観（Active View）



能動的学習観

学習の定義：「人が、自分がすでに持っている知識構造（スキーマ）を通して外界と相互作用しながら、新しい知識を主体的に構成すること」。

学習は個人の活動であり、その効果は個人の能力として評価される。

学習は一人で完結しない。 他者との関わり合いの中で知性は発達する

社会的構成主義的学習論

提唱者：レフ・ヴィゴツキー（Lev Vygotsky）

学習は教師の協力や仲間との協働によって可能になる。
知的な能力は他人との関わり合いの中から発達する。

発達の最近接領域（Zone of Proximal Development）：
自分一人で行えることと、他者の助けを借りればできる
ことの間の領域。この領域における「協働学習」が、
学習者の能力を最大限に引き上げる。



「協働の中では、学習者は自分一人でする作業のときよりも有能になる。
解くことのできる知的難問の水準を高く引き上げる。」

「個人の能力」を測る学校、「チームの成果」を求める社会

学校での学習



他者の助けなしで有能であることが求められる（テストで他者の助けを借りるのはカンニング）。
学習は「個人」のものであるという前提。

職場での学習



仕事の90%以上は個人ではなく、他者と協力し、知恵を借り、互いを補い合いながら達成される。
学習は個人の中に閉じるものではなく、他者とのコミュニケーションの中で生まれる。

日常生活では、人は他者と共に「生きる」ことで有能に振る舞う。
社会的構成主義は、この現実を学習論に取り入れたものである。

学習理論の進化が一目でわかる：4つのアプローチの比較

	行動主義	認知主義	構成主義	社会的構成主義
学習の定義	行動の変容	心的構造（シエマ） の変化	知識の主体的構築	他者との協働による 意味の構築
学習者の役割	受動的（刺激への反 応者）	能動的（情報処理 者）	能動的（知識の構築 者）	能動的（社会的な参 加者）
重視する点	観察可能な行動 （アウトプット）	内部の心的プロセス	個人の知識構築プロ セス	社会的相互作用・文 脈
主な提唱者	スキナー	ピアジェ	（ピアジェに基づく）	ヴィゴツキー
キーワード	オペラント条件づけ	シエマ、同化、調節	能動的学習	発達の最近接領域、 協働学習

理論から実践へ：日本の学校教育は「教える」から「学ぶ」へ大きく舵を切った

約10年ごとに改訂される学習指導要領が、新しい学力の育成を目指し全面的に転換。

目標：3つの資質・能力を育む「主体的・対話的で深い学び」への転換。

授業スタイルの変化：

旧（Past）：教師が黒板に書いたものを児童生徒が書き写す「一斉講義型」。

新（Present）：教師は「ファシリテーター」となり、子供たちが主役となって学び合う。

評価の変化：テストの点数だけでなく、友だちと協働したり、自ら学習を調整したりする「学習に向かう態度」も重視される。



ファシリテーターとしての教師と、テクノロジーを活用し協働する子供たち

A Snapshot of the Modern Classroom

1. 問いかけ: 教師が「この面積はどうやったら出せるかな?」といった問いを投げかける。
2. 対話・協働: 子供たち同士で意見交換したり、グループで話し合ったりして考えを深める。
3. まとめ・発表: グループで意見をまとめ、発表する。

The Role of Technology

- GIGAスクール構想により、1人1台のタブレット端末導入が進行。
- 子供たちは学習のあらゆる場面で端末を活用する。



社会人教育の転換点：知識の伝達者から、学習の支援者へ

The Adult Learner is Different

社会人の学習者は学校の生徒とは異なり、伝統的な学校教育型の方法では満足しない。重要なのは「学習者の自己決定性」を尊重すること。

The New Role of the Coordinator/Trainer

- 役割の転換：「教える」から「学習者の学習活動を支援する」へ。
 - 学ぶべきことの選択は学習者に委ねる。
 - 能力診断などを通じ、学習者自身が課題に気づけるよう支援する。
 - キャリア目標の検討を支援するが、中期的な学習計画は学習者自身が決定する。

研修スタイルの変化

講師が一方的に知識を伝達するスタイルから、講師と受講者が共に考える、あるいは受講者同士の議論を進行するスタイル（例：ケーススタディー）へ。



研修を「問題解決の場」に： GE社の"ワークアウト"に学ぶ人材育成

A New Direction for Corporate Training

学習者一人一人の経験や、現場で直面している問題に対応する必要がある。現場のリアルな問題をテーマとし、学習者同士が経験を出し合い、調査・分析を通じて問題解決を行う場として研修を設計する。

Case Study: General Electric (GE) "Workout" Program

1989年に導入された社内変革活動。
製造、技術、サービスなど部門の境界なく（boundaryless）チームを編成。
社内の問題を解決することだけを目的としたミーティングを繰り返す。
外部のコンサルタントや大学教授が「ファシリテーター」として進行をサポート。

“「ワークアウトは、当社の社内変革で最も重要なステップとなる自己啓発だった。」”

— ジャック・ウェルチ, 1995年アニュアルレポートより



研修はきっかけにすぎない。 日常業務の「経験」から学び続ける組織へ

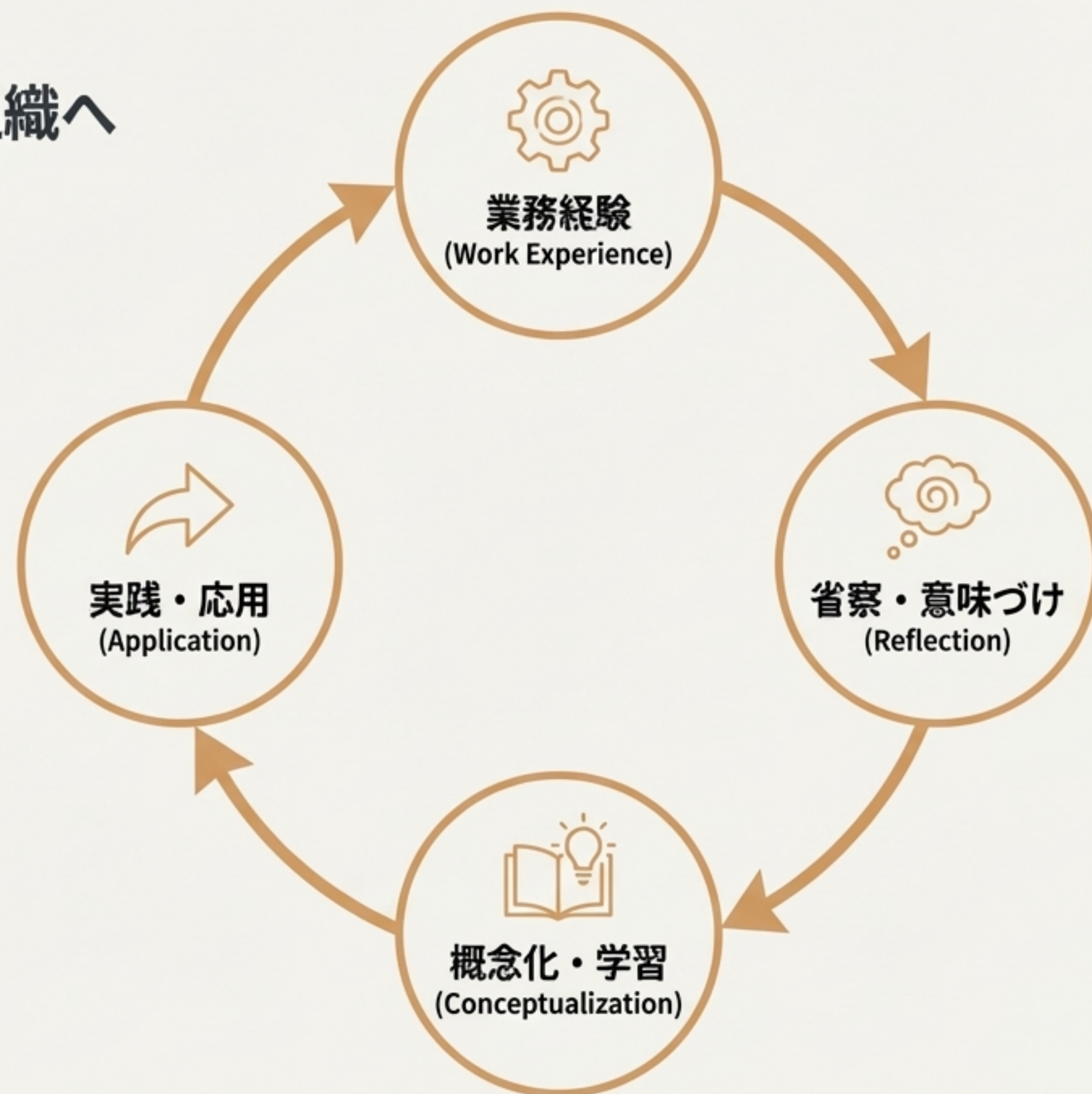
“「何かを学ぶためには自分で体験
する以上に良い方法はない」”
— アインシュタイン

事実、成人の能力開発の70%以上は「経験」によって説明される。社会人は研修よりも日常の業務経験から学ぶことの方がはるかに多い。

The Ultimate Goal for L&D

単発の研修を提供することではなく、学習者が日常業務の中から絶えず学ぶサイクルが自律的に回る組織状態を作り上げること。

求められる支援: 経験から学ぶための方法を伝えること、経験から意味を抽出するための支援。



普遍的な学習理論は存在しない。重要なのは、 状況に応じて理論を使い分ける動的な学習観である

行動主義に基づくドリル学習や、
構成主義に基づく問題解決学習など、
伝統的な学習理論も特定の領域では
依然として有効である。

教育や学習の目的・価値は時
代と共に変化する。



「常に最適なバランスを探し続ける」

The Modern Educator's Mindset

教える側にも学ぶ側にも、唯一絶対の正解はない。課題と状況に応じて、新旧さまざまな理論からのアプローチを試みながら、常に最適な均衡点を探し続ける「柔軟で動的な学習観」を持つことが期待される。